

開催地名	北海道むかわ町
開催日時	令和5年9月30日（土） 13:15 ～ 14:30
開催場所	四季の館
語り部	齊藤 賢治 （岩手県大船渡市）
参加者	むかわ町民 73 名
開催経緯	本町は平成30年に発生した北海道胆振東部地震による被災から今年で5年を迎え、復興に向けた施策を着実に進めているところである。また、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震の特別強化地域にも指定されており、発災時には大規模な津波被害も懸念される。こうした状況をふまえ、東日本大震災の津波を経験された講師による貴重な体験から、地震による被災の経験を風化させることなく、大規模津波への防災意識向上を図ることを目的に本講演会を開催したものである。
内容	【あなたに助かってほしいから】 （1）3月11日 岩手県大船渡市は「椿の里」と呼ばれ、飛鳥Ⅱをはじめとする大きなクルーズ船が寄港する三陸沿岸に位置する町だ。観光客でもにぎわうこの町は、2011年3月11日に津波により壊滅してしまったのだ。 当時、さいとう製菓株式会社 専務取締役であった。大船渡市内にて菓子製造の工場を持ち、この日も数十名の社員と共に業務にあたっていた。14時46分、（大船渡に地震が到達したのは1分30秒後）震度6弱の地震が発生した。事務所は大きく揺れ、まともに立っていることもできない。約1分後の14時49分には、この地震を記録に撮るために、スマートフォンを片手に動画を回した。電柱はしなるように揺れ、ゴゴゴゴと音立てて揺れ続ける。齊藤氏の声が飛び交い、社員を避難させ始める。 「この揺れは津波が来る。みんな逃げろ。」 避難までの決断は2分程度だった。目の前の川では数万匹と思われる小魚が飛び跳ね、だれが見ても異常な光景だった。15時前には近くの高台に上がり海の様子を見ていた。 15時20分（地震発生から34分）、全社員が高台に避難を完了し町を見下ろしていると近くの海岸に津波が徐々に陸に上がり始まった。海岸の向こうには大きなセメント運搬船が岸から離れ港外に出ようとしていた。その時見たものは、早いスピードの狂った津波だった。防波堤は一瞬にして消えてなくなり、津波は速度を速め波の高さを増しながら町を飲み込んでいく。 15時26分（地震発生から41分）、町は海に飲み込まれ、町は壊滅。数軒のビルの先がぼつぼつと見えるだけだった。その後も引き潮が始まり次々と津波が押し寄せ、建物と言う建物をこれでもかと破壊した。動画を見ればわかる通り、生死を決める時間はたった30分しかなかったことがわかる。パニック状態の30分は冷静さに欠けることもあり、あまりに短い時間だ。 ではなぜすぐに高台へ避難と判断できたか。1960年のチリ地震津波で一家全滅しかけ

た経験があった。今でもその時の津波の夢を見るくらいだ。なので、常時、津波への備えをしていた。だから、大地震が起きたとき、津波が来るとすぐに判断できた。この経験・備え・判断により、多くの社員たちの命が救われた。

（２）機能しなかった湾口防波堤や防潮堤

津波が引いた後の湾口防波堤や防潮堤は、特に湾口防波堤は跡形もなく粉碎していた。海側から来た波と、引き波による波はコンクリートの基礎部分をえぐり多くの堤防は破壊された。当時の湾口防波堤の高さは海面から 4m。大船渡市に記録されている最大津波は 10m 余り。そもそも湾口防波堤として機能できない高さだったことがわかる。

また、津波を止める構造も誤ったものだった。それは、コンクリートの重さで津波を防ぐというものだった。結果は、冒頭でもある通りコンクリートが砕かれた。現在では、湾口防波堤そして防潮堤の構造が見直され、鉄筋構造とし鉄パイプを地中奥深くに差し込みこれを芯として作る構造となっている。また湾口防波堤の高さは 11.3m、幅は 20m と改良され津波対策としている。むかわ町の津波対策はどうだろうか。グーグルマップで、大船渡市とむかわ町に仮に浸水高 13m が上がったとして浸水面積を見た目で比べると圧倒的にむかわ町のほうが浸水面積は多く危険だとわかる。防波堤は設置されていないのでその検討と避難場所の設定など今一度総合的に見直す必要があると思われる。

（３）津波てんでんこ

津波てんでんこという言葉がある。これは、津波が来たら、それぞれが個々で逃げるという意味だ。一見冷たい言葉のようにも思えるが、これは相手のことを思い、生きるための言葉なのだ。生きていれば必ずまた会えるというメッセージが込められている。この津波てんでんこを実行するためには、根底に防災意識を高めた上に、みんなは逃げていると一人一人が信じて安全な場所に避難することが必要である。では、東日本大震災の時はどうだったのだろうか。大船渡市では、340 名が死亡。79 名が行方不明者となった。津波に巻き込まれた場所の統計がある。地元紙岩手日報社の調査では 44.9% は自宅、19.3% は路上、9.1% は車の中であった。

多くの人が、「今まで津波が発生したことが無い」「ここまで来るとは思わなかった」「警報や注意報が出たが津波は来たことが無い」そして、「まさか本当に来るとは思わなかった」と口にする。災害の場所においては危険な状況であっても、危険を認めようとせず、ちょっとした変化なら「日常のこと」として処理してしまう人間の心理で、これが『正常性バイアス』と言われている。心理的なものだけではなく、若い世代は津波の怖さを知らなかったから逃げなかった者もいた。このような、心理状態や無知識が避難判断を鈍らしてしまったのだ。結果、多くの人命が奪われた。被災現場ではあってはならない事もあった。一部の犠牲者の中には異なる理由で命を落としたことがわかっている。それは、避難場所に避難しながらも津波に巻き込まれた被害者だ。避難場所とは行政機関で設定する場所、避難場所に来れば命が助かる、これが避難場所である。安全である場所で命が奪われている。この割合は、9.5% にも及ぶ。避難場所はハザードマップで指定されており安全な場所とされている。正常性バイアスを防ぎ、正しい避難をした方々だったはずだ。陸前高田市の避難場所に指定されている体育館には 200 名余りの避難者が押し寄せたと言われている。80 名の遺体が発見された。避難者が体育館内で死亡、

多くの方々が行方不明となった。当時若干二十歳のいとこの娘が避難場所となっている体育館で卓球の練習をしていた。強烈な地震に見舞われたが避難場所なので、その場に留まっていた。しかし、残念ながら行方知れずとなったが2カ月後、遠く離れた対岸で発見された。津波は床から徐々に皆のいる観覧席へと上昇してきた。観覧席の上の方には窓ガラスがあるが、一瞬にして窓を破り避難してきた皆様を怒涛の中へと巻き込んだものと想像する。この体育館内で奇跡的に助かった方が3名ほどいた。そのうちの1名に当時の話を聞くことができた。その方は体育館天井の鉄骨にしがみつき津波を絶えた。一人また一人と流されていくその姿を見ていた、彼は地獄のようだったという。流された避難場所は1か所だけではない。役所の職員にハザードマップとは何なのでしょうかと問うたところ、ハザードマップはただの目安に過ぎないという返事だった。いざという時、安全に避難するためには、無知では助からない。自分が住む町、避難場所の詳細、海拔は何メートルで海からの距離は何 Km なのかそしてその場所が危ないとしたらさらに高い場所に逃げられるのかを日頃から確認することが大切だ。避難する場所の条件は「連続的に高いところへ、さらに逃れる事ができる」だ。これは鉄則である。

東日本大震災で多くのものを失った。町からは何もなくなり、絶望を経験した。しかし現在は、明るい街を取り戻し、町や人々は平静を取り戻している。津波による被害にあわないために高台移転や防波堤は高くなり強化されるなど、町全体が前進しているのだ。

しかし、大船渡市に限った事ではないが、その後の大きな問題として災害による影響も含め人口は激減している。大船渡市は第二の津波に直面していると思っている。まとめとして、大きな地震が来たら津波が来ると思い早い時間に高いところに避難をする。上がったら戻らない。



開催地より

大規模津波被災時の現地の惨状や、迅速的確な避難行動がいかに重要であったかなど、講師の体験に基づく説得力ある講演から、津波への備え、避難行動の重要性を改めて認識するとともに、地震による被災から5年という節目の年に、改めて防災意識を高める貴重な機会となった。